

論文審査の結果の要旨

氏名：及川 晃 希

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：メタフィクション小説としての『ファウストゥス博士』、『選ばれし人』—後期トーマス・マン作品の語りの自己言及性について

審査委員：(主査) 教授 初見 基

(副査) 教授 大羅 志保子 上智大学教授 北島 玲子

本論文は、従来 19 世紀「リアリズム小説」的手法を 20 世紀にも旧態依然として維持した、という否定的な評価を受けがちだった作家トーマス・マンの晩年の 2 小説作品を対象として、そこでは両作品にあっては、「メタフィクション」「自己言及」的な要因が強く出ている、言い換えるなら、作家が「書く」という自らの行為を反省的に捉え、そしてその反省性を作品内に顕在的に取り込んでゆくかたちで作品形成をするという、20 世紀欧米文学において積極的に打ち出された特性をマンも共有している、このことを明らかにしようとしたものである。

序章においては、対象として『ファウストゥス博士』および『選ばれし人』というマン晩年の 2 作品を「自己言及性」という観点から分析する、という設定がなされた(第 1 節)うえて、戦後ドイツにおけるマン受容が政治的な面からの否定的な側面の強調に傾き作品分析がなおざりにされてきた様子(第 2 節)、そしてまた、マン自身が自作について多くを語ってきたことにマン研究も引きずられていた面があった受容・研究状況(第 3 節)が指摘され、マン没後 20 年の 1975 年に、それまで封印されていた彼の日記が公開され以後それが刊行されることによってマン研究が新しい局面に入った現況(第 4 節)が紹介される。

全 7 章のうち、第 1 章から第 4 章では小説『ファウストゥス博士』が対象として論じられる。

第 1 章では、『ファウストゥス博士』の研究史が概観され、1947 年に発表された本作品が、当初は第二次世界大戦直後の政治状況のなかで、「ドイツ問題」を提起しているものと捉えられ論じられてきた、それが時間の経過とともに後景に退き、1970 年代以降は政治的な内容よりもその作品技巧が注目を集め、そこでの「語り」のあり方に焦点が当てられ、さらにはパロディ、間テクスト性といった面から検討されるようになっていく現況が示される。

第 2 章では、『ファウストゥス博士』において、作者マンがいかに「リアリティ」をもった描写を心がけたかが、作品発表前に自身によってしばしば実施された「朗読会」(第 1 節)や作中人物の「モデル」問題(第 2 節)などを手がかりにまずは示される。そしてそのうえて、しかしながら近年の研究ではむしろ、「リアリズム作家トーマス・マン」像に疑いが差し挟まれている点を踏まえ、《小説作品があくまでも言葉によって作られたフィクションであり、現実世界を反映することは出来ないという認識のもとに、象徴的な意味のシステムを作り上げている》(46 頁)点こそが、トーマス・マンのアクチュアリティであるという筆者自身の問題意識が提示される(第 3 節)。

第 3 章では、小説『ファウストゥス博士』の分析にもとづき、その作品の特性が明らかにされている。そのために、作品中での登場人物の「名前遊び」(第 1 節)、《「無からの創造や発明」》(51 頁)をはなから断念した「パロディ」性(第 2 節)、そして作品の構造を暴く装置を作品内に設定している点(第 3 節)などが論じられる。

第 4 章では、『ファウストゥス博士』という作品内の「語り手」であるツァイトブロームのあり方が分析される。まずは、語り手ツァイトブロームと語られる対象である主人公レーヴァーキューンとの関係を、それが同一人物であるかどうかという疑問設定のもとに論じられ、《レーヴァーキューンがツァイトブロームの想像の産物である》(60 頁)と見なされ、そこから《『ファウストゥス博士』が「創作する」という行為そのものを扱った「メタフィクション小説」である》という論点と結びつけられる(第 1 節)。また、「虚構の伝記作者」である語り手ツァイトブロームが設定されている必然性が、第 5 章以降の『選ばれし人』

との関連で指摘され（第2節）、さらにその語りのあり方のなかにローレンス・スターン『トリストラム・シャンディ』からの影響が指摘され（第3節）、『ファウストゥス博士』が「メタフィクション小説」であると結論づけられる（第4節）。そのことの傍証として、作中の登場人物をめぐるエピソードが2つ挙げられ（第5節および第6節）、《「みずからが虚構であるという事実」に注意を喚起するというメタフィクション小説の特徴》（71頁）がさらに示される。

論文後半の第5章から第7章では小説『選ばれし人』が対象として論じられる。

まず第5章では、その研究史が概観されることで、そのなかで近年では、『ファウストゥス博士』と同様に「語り手」の問題に焦点があてられるようになっていく点が指摘され、これを本論文の主旨である「メタフィクション」性と結びつけて論じることが示される。

第6章にあつては、小説『選ばれし人』が踏まえていた、中世ドイツの詩人ハルトマン・フォン・アウエによる『グレゴリウス』との関連が検討され、先行作品を「詳細化」した局面（第1節）と、それをおおきく変えた「差異化」した局面（第2節）という二側面が指摘される。

そして第7章では、『選ばれし人』のなかで言及され、また研究においてもしばしば取り上げられる「物語の精神（*der Geist der Erzählung*）」についての分析がなされる。まずは「物語の精神」とは《「全知の視点」を持つものの、普通の「全知の語り手」ではない》（91頁）との位置づけがなされて、そのうえで本作品が《「みずからが虚構であるという事実や、それ自身が書かれる過程に注意を喚起する」メタフィクション小説》（96頁）であると結論づけられる（第1節および第2節）。そしてこの論を補強する点として、本作品が中世文学のパロディであること（第3節）、そして本作品の語り手クレメンスの語りのあり方が「自己言及的」であること（第4節）などが論証される。

最後の「結論と今後の課題」においては、改めて、《「作品を現実に塚づけようとするマンの執筆手法」》と、《その執筆手法とは相反するような「…」遊戯的なあり方》が指摘され、《「一方でリアリズム文学的であり、他方で遊戯的である」》（102頁）マン作品の特性が確認され、これを、これまで述べてきたように「メタフィクション小説」として捉える視点の有効性が唱えられたうえで、今後の課題として、その現在の意味をどのように捉えるべきかという問題が提示されている。

以上、本論文においては、『ファウストゥス博士』および『選ばれし人』という後期トーマス・マンの2作品が、かつてはもっぱらそのように理解されていた、素朴な叙事性ととどまるものではなく、「書く」という己の行為を対象化してそれを作品のなかで自覚的に明示しつつ小説世界を形成するという「メタフィクション小説」であると示すことに成功している。「リアリズム」「フィクション」といった用語に若干厳密性を欠く箇所も見受けられること、先行研究をよく踏まえそれを逐一提示している研究姿勢自体は誠実な態度として高く評価できるものの、細部の立証においても先行研究に頼るのではなく、より独自の論理展開が期待された、等いささかの不満も残りはするが、論文全体を損なうだけの瑕疵とはいえない。

よって本論文は、博士（文学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成 27 年 1 月 22 日